

# 「自分で考える子」に育てる

校長 石田 雄介

運動会では、平日にもかかわらず大勢の保護者の皆様からご来校いただき誠にありがとうございました。それまでのうっ憤を晴らすように、子どもたちは生き生きと走り、玉を投げ、五泉甚句を踊りました。コロナ禍でのサイレント応援も、応援団の子どもたちが気合いを入れて奮闘してくれて、拍手で盛り上がりました。おかげさまで、子どもたちの心に残る運動会となりました。これまでのご協力に心より感謝申し上げます。

さて、6月は学習に一層力を入れて参ります。目下、学習指導要領に示される“主体的・対話的で深い学び”を目指し、授業の改善を進めているところです。

「**主体的な学び**」とは、自分で何が問題かを考えて自ら判断し、解決に向けた行動を進めていく学びです。似た言葉に〔自主的＝明確な目標に向かい、言われなくても取り組む〕がありますが、〔主体的〕は、“解決のために自分の頭で考えること”に重きがあります。そしてこの〔主体的〕は、**本校の教育目標の「自分で考え」**に当たります。

では、子どもが主体的に学ぶようにするには、どうすればよいのでしょうか。

それには、子どもの自主性を潰さないようにすることが一番です。

「こうしなさい」「何やっているの、ダメでしょ」「なんでそんなことしたの」「こうすればいいの!」「勉強しなさい」…などの言葉はうまくありません。学びのスタートである自主的な行動を否定されると、自分で考えて問題を解決しようとする気持ちが失せ、指示がないと動けない子どもになってしまいます。

また、もしも放っておくと子どもが何もせず動かないのなら、こちらがヒントを与え、〔考えさせて、自分で動く〕という流れを作ってあげる必要があります。

子どもが失敗したのなら、「それは違う!」ではなく、「何が違うのか」を教え、「どうすればいいのか」を考えさせ、子どもが自分で決めて動けるようにしてあげることが大切です。学校でも家庭でも、このように子どもに接していきたいですね。

私たちは、とにかく子どもに教え込みがちです。失敗させないようにときめ細かく教え、丁寧に具体的に説明し、何度も繰り返し練習させ、時には叱り……。しかし、教えれば教えるほど、子どもは自分で考えるということをしなくなります。

子どもの主体性を伸ばすなら、子どもに任せる。まずは、(うまくいかないと予想されても)子どもの考えでやらせてみるのが、主体的な学びにつながると言えます。

ある朝の登校時、一人の男の子がビオトープ前で私に話しかけてきました：

「先生、ほら、種をまいたら芽が出たんだけど、長い芽と小さい芽があるよ。どうして?」  
「そうだね、おもしろいね。何かわけがあるのかな」… その子はじっと芽を見て考えていました。主体的な学びの始まりの姿でした。